

『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第二釈名」の分析

菅 野 博 史

1. 問題の所在

本稿は慧均『大乘四論玄義記』（以下、『四論玄義』と略記する）の「仏性義」について考察する。吉蔵伝撰『大乘玄論』巻第三の「仏性義」は約一万三千文字であるのに対して、『四論玄義』の「仏性義」は約四万文字であるので、約三倍の分量である。それだけに研究の価値は高いと思うが、「仏性義」の本格的な研究は今後の研究課題であると言わざるをえない¹⁾。「仏性義」を構成する四章のうち、第一章「大意」についてはすでに別稿²⁾において考察したことがあるので、本稿では、第二章「釈名」を範囲とし、その思想を紹介、考察する。周知のように、『大乘玄論』の仏性義の十門の中にも、「五釈名門」があり、『四論玄義』の「第二釈名」と対応する内容を説いているので、参照する必要があるが、本稿では紙数の関係もあり、その課題は別稿を期す。

2. 三説の紹介

『四論玄義』「仏性義」の「第二釈名」では、「仏性」の解釈について、三種の異説を紹介・批判した後に、自説を述べている。「仏性」の仏と性の特徴を、因果の視点から規定したものである。結論を先取りすると、第一説は因、第二説は果、第三説は因と果の視点からそれぞれ規定したものである。一般的な理解では、「仏性」という一概念は、仏と性を意味するのではなく、仏の性という意味である。「仏」が悟りの実現という果の領域において成立するものであることには異論がないであろうが、「性」をどのように理解するかによって、三説の相違が生じたと思われる。

まず、第一説の提唱者については無記名であるが、次のようにある。

一言、仏与性並在因中之目。一切衆生有靈知覚性、得仏無改、簡異木石等無性。故大經云、一切衆生皆有仏性也³⁾。（『大日本続蔵経』1: 74, p. 45 a16-18. [崔] p. 343）⁴⁾

ここに出る「靈知覚性」は、「靈なる知覚の性」と解釈した。「仏」は一般的には果に相当するように思われるし、後の二説もそのように主張するのであるが、第一説の立場に立つと、因位の衆生に備わるものである以上、「靈知覚」=仏の性は因の範囲にあると解釈したのであろう。文面による限り、「靈知覚」=仏は因の範囲にあると解釈したのであろう。この解釈は、「一切衆生皆有仏性」という経説に基づき、さらに衆生=因と規定したうえで、その衆生に備わるとされる仏性は因であるはずであると主張したものである⁵⁾。

第二説は、龍光寺僧綽（生没年未詳）の説として取りあげられている。

二龍光法師云、仏之与性、在当果地。所以然者、仏名覺了、因無其義故。性本不改。仏即凝然、故受性称。因中無常、故性義不定。而今因中並称仏性者、皆従果為名。論師取彼師意云、欲示果之二種、必是心因所得。亦斥小乘与外物虚妄等也。此意後簡之。（p. 45 a18-b5. [崔] p. 343）

龍光寺僧綽は開善寺智蔵（458-522）の弟子であり、『四論玄義』には、しばしば「龍光伝開善義」と出る⁶⁾。もちろん、二諦の体について智蔵が同体とするのに対して異体とするなど、師と異なる説を唱える場合もある⁷⁾。僧綽の解釈は、仏は覺了=悟りという意味であり、因にはその悟りがないので、仏は果を意味する。また性は不改という意味であり、因の範囲では無常であり不改とは言えないので、果に当てはまるというものである。因位である衆生に、果である仏性が備わるという経説は、果の立場を因に適用したものにすぎないと説明される。僧綽が智蔵の意を採用して、「[仏と性の] 果の二種は、必ず心の因によって得られるものである」といっているのは、智蔵が心を正因仏性の体とすることに基づくものであろう⁸⁾。

第三説は開善寺智蔵の説である。

三開善知蔵法師云、果地是仏非性、因中是性非仏也。所以然者、仏名覺了、常住為宗。因無其義、故果但是仏也。性者、不改為宗。因中得仏之理、此無改易、故是性義也。果不感果、無有其非。因則非至果故、因但是性。而今果亦名性、是從因為名。因亦称仏、是從果受称。所以兩相従者、欲示因果之理必然、相関（←開 [崔]）⁹⁾ 有在。即斥昔日教与木石虚空等也。（p. 45 b5-11. [崔] pp. 343-344）

智蔵は、仏性の仏を果地、性を因中と規定している。その理由としては、仏は覺了に名づけたものであり、常住を根本趣旨としており、因にはそのような意義はなく、果が仏に相当すると説く。一方、性は不改を根本趣旨としており、因の範囲に属する得仏の理は不変なので、性といわれる。これは、仏と性をそれぞれ

(50) 『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第二釈名」の分析（菅 野）

果と因とに対応させて両者を区別したものであるが、しかし因と果の両者の相関関係は存在するので、果が性と呼ばれたり、因が仏と呼ばれたりすることもあることを指摘したものである。なお、引用文末尾の「斥昔日教与木石虚空等也」を参照すると、第二説の末尾の「斥小乘与外物虚妄等也」の「虚妄」は、「虚空」の誤りかもしれない。『四論玄義』は以上の三説を紹介した後に、第四説として慧均の立場を明らかにしている¹⁰⁾。

3. 『四論玄義』の立場—大乘無所得の義

上記のように三説を紹介したうえで、『四論玄義』は第四家として、自身の立場を「大乘無所得の義」として説明する。この部分はかなり長文なので、内容を三段落に分けて紹介する。第一に、「大乘無所得の義」の立場からの解釈を示す。第二に、三種の解釈方法に基づく「仏」と「性」それぞれの解釈を提示する。第三に、五種仏性説を示す。

(1) 「大乘無所得の義」

第一に「大乘無所得の義」の立場からの解釈を示す。

第四家、今大乘無所得義、則不然（←勝[崔]）。何得分派、縁種種釈、終不離断常二心有所得也。經自說、仏性非有非無、非内非外、非因非果（←果非[崔]）等¹¹⁾。至論仏性、非在非不在、無所的当、一道清浄、無在無不在。雖無在無不在、而仮名説在不在。無在、則不在因果已性、無不在、遍在因果已性。（p. 45 b11-16. [崔] p. 344）

ここでは、自らの立場を「大乘無所得義」と規定し、「有所得」と対立させている。この立場からは、經典を引用して示すように、仏性はあらゆる相対概念の把握を拒否する。とくに、因でもなく果でもないと明示されている。さらに、仏性を「至論」すると、仏性の存在、非存在のいずれをも超越した立場が示される。と同時に、「仮名」の立場からは、存在、非存在のいずれもが説かれうる。この仮名の立場において仏性の存在が否定されれば、仏性を因果的立場から説明することは不可能であるし、仏性の存在が肯定されれば、仏性を因果的立場から説明することは可能となる。

『四論玄義』は次に、この議論を、『維摩経』における天女と舍利弗の問答を引用して説明する。

如天女問舍利弗、女（←汝）¹²⁾身色相、今何所在。舍利弗曰、身色相無在無不在。天女曰、善哉。無在無不在、仏所説也¹³⁾。若具足言之、無在不在、無在無不在、具足中仮也。故今仏性非因説為因、非果説為果、故在因名為仏性、在果名為涅槃。故仏性法性法界真如

等、並是一物、種種名不同。亦名仏性如来性三宝性。故言仏法僧三宝性、無上第一尊¹⁴⁾。
(p. 45 b16–c5. [崔] p. 344)

『維摩經』は天女の女身の色相について存在、不存在をどちらも否定する立場が仏の教えであることを示している。この論理を仏性についても適用する。『維摩經』にない「無在不在」が付け加わっているが、通常は「無在無不在」と同じ意味と解釈されるが、ここでは、わざわざ「無在無不在」の前に独立して置いているのに注意して、「在・不在」の無いことを意味していると解釈した。そして、因でないものを因と説き、果でないものを果と説くという立場から、仏性は因の範囲にある場合をいい、涅槃は果の範囲にある場合をいうとする。このように理解すれば、引用文に示されるように、仏性と法性、法界、真如などのさまざまな概念（当然、涅槃を加えてよい）は同一視されるのである。

この段の最後には、結論的に、仏性と因果との関係について、次のように明らかにしている。

至論仏性、皆非、而無所当。雖非因果、而能為因果之本。不唯為因果作本、亦為一切諸（←清 [崔]）法作本也。此即不当当仏性（←果）¹⁵⁾ 而名為因者、則非仏性為因性也。不当当涅槃而名為果者、即非涅槃為果性也。故雖非因而為因本、故仏性非因亦為二因。（仏性非果能為果本。故非果為二因を削る）¹⁶⁾ 仏性非果能為果本、故非果為二果。此即二果二因、是因果果因。以非因非果為本。本故為正因也。用故為傍。傍以因正為名、正以因傍得稱。然待傍為正、此未是好正。能無傍無正、乃名為正。此正不可復言。言正則屬傍、言体即屬用。故仏性一道清淨無二。無二而為二、故有因果果因相待得名。（p. 45 b11–c16. [崔] pp. 344–345）

究極的立場においては、仏性は因果を越えていることを明かす。その意味では、仏性は非因非果と規定される。一方、因と果のために本となることができるという立場から、二因（因と因因）と二果（果と果果）を開くことができること、これらの因と果は縁起的関係に基づいて、因の果（因に裏付けられた、因と相対的な果という意味）、果の因であることを明らかにしている。さらに、非因非果が本、体であり、正因と規定される。引用文には説明がないが、因・果は用、傍とされるはずである。そして、これらの体と用、正と傍も相対的な関係であり、この相対性にとどまる立場では、まだ本当の「正」は成立せず、相対性を越えたところに、本当の「正」が成立すると主張している。結論として、仏性は一道清淨無二であり、しかも無二であって二である。二を認める立場では、因の果と果の因が成立し、それらは、相対的に名づけられたものであることを明らかにしている。

(52) 『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第二釈名」の分析（菅 野）

(2) 三種釈義

前項の末尾に、因の果、果の因という、因と果の相対的關係に基づく概念が示された。この概念成立の相対性について、三種の解釈方法を示す。これは、吉蔵のいわゆる四種釈義と共通するものであり、筆者はすでに部分的に考察したことがある¹⁷⁾。紙数の関係でここで詳しく再考察することはできないので、別稿を期す。

(3) 五種仏性の説

次に、五種仏性説を示している¹⁸⁾。五種仏性にさまざまな説があるとしたうえで、ここでは、次のように開善寺智蔵の説のみを引用している。

次約經開五種仏性。釈名、師説不同。開善智蔵法師云、正是專當不偏義。衆生神明与如来種智、雖復大小之殊、而同是慮智。性相感召、故謂名正因、正感仏果。対縁因為名、非傍助義。縁因者、縁由為義。雖有正因、不脩万行、終不能得果。由藉万善脩行故、得仏果。対正因為縁名、亦名境界。如草木虚空等、其不能了出仏果。但為觀智所縁、為心作境、故名境界也。了因者、照了為義。万善之類、顯出仏果、故名了因。如灯（←燃[続]）¹⁹⁾ 照物、譬其対境明了也。果者、以酬因為義。果果者、謂從果生果。故名果果也。（p. 46 a5-14. [崔] p. 346）

智蔵の五種仏性は、正因、縁因（境界因）、了因、果、果果というものである²⁰⁾。ここでは『四論玄義』自身の五種仏性説については触れられていないが、後段の「第四広料簡」の「第一辨宗途」に説かれる²¹⁾。

最後に、智蔵の五種仏性説に出ている概念について、改めて『四論玄義』の立場から、次のように新しい解釈を与えている。

今謂三種意如前。正是遠離為義。故華嚴經性起品云、正法遠離一切趣不趣也²²⁾。大品經無生品云、何等波若波羅蜜。答云、遠離、故名般若波羅蜜。何等法遠離。遠離陰界入等、乃至一切法内空外空等也²³⁾。正是中実為義。如正觀論也。亦得不偏釈也。因者、本義、由義也。故經言、無住為本²⁴⁾。般若能（←非[崔]）生一切法等也²⁵⁾。縁因者、亦得如旧釈名得也。了因者（←了因者了因者[崔]）、了不二為義。亦如常釈得也。果与果果、亦類釈得。雖爾、意永異諸師也。至論仏性、仏窮四句百非、故仏也。性是正義、正是実義。窮正実性也。（p. 46 a14-b6. [崔] pp. 346-347）

ここでは、智蔵の提示した「正因」を改めて『四論玄義』の立場から解釈している。「正」は遠離、中実²⁶⁾、不偏という意味であり、「因」は本、由という意味で、その因が根本となって、あるいはその因を経由して一切法が生ずると述べている。縁因については古い解釈を肯定し、了因については、不二を了解することと規定しながらも通常の解釈を肯定し、果、果果についても前釈に対して特に異議を述べていない。しかしながら、『四論玄義』の立場は、最終的には諸師の

解釈と相違することを主張し、最後に、仏は四句・百非、それによって指し示される正実の性を極めると述べている。この「第二釈名」の段では、『四論玄義』自身の仏性義は十分に展開されず、その課題は「第四広料簡」において取り組まれている。

本稿では、『四論玄義』全体の詳細な研究を目指す過程において、「第二釈名」の段をやや詳しく取りあげて考察した。

- 1) 『四論玄義』の仏性義についての専論については、伊藤隆寿「四論玄義の仏性説」（『印度学仏教学研究』21-1, 1972年12月, pp. 327-329）、同、「四論玄義仏性義の考察」（『駒澤大学仏教学部研究紀要』31, 1973年3月, pp. 325-336）がある。また、南朝の仏性思想の全体を扱う論考のなかで、『四論玄義』に言及する研究の代表的なものに、湯用彤『漢魏兩晋南北朝仏教史』（初版は商務印書館, 1938年。今私が使用しているものは、北京大学出版社, 1997年）第十七章「南方涅槃仏性諸説」がある。なお、『大乘玄論』の国訳者、宇井伯寿氏は、「仏性義」の国訳にあたり、脚注に『四論玄義』の所説との対照を試みている（『国訳一切経 諸宗部一』所収、大東出版社, 1937年）。
- 2) 拙稿「『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第一大意」の分析」（『創価大学人文論集』24, 2012年3月, pp. 47-71）を参照。
- 3) 『南本涅槃經』巻第七、邪正品、「一切衆生皆有仏性。」（T12. p. 645 b10-11）を参照。他に、『南本涅槃經』巻第八、文字品（同前, p. 654 b20）、同巻第九、菩薩品（同前, p. 660 a26-27）にも同文がある。
- 4) なお、『四論玄義』からの引用は、『大日本統蔵經』所収本からとし、以下、丁・葉・段・行のみをCBETAに基づいて記す。あわせて、崔鉉植校注『校勘 大乘四論玄義記』（〔崔〕と略記する。韓国金剛大学校仏教文化研究所, 2009年）の頁数を記す。
- 5) 『大乘玄論』巻第三、「第二師釈、仏性者、此是因中。難第一家云、經既言一切衆生悉有仏性。云何言因中無有此名。因中衆生有覺義、故是仏。有必当之理不改、名性也。」（T45. p. 38 b13-16）を参照すると、衆生に悟りの意義があると指摘しているが、これが衆生の段階で実現しているとはいっていない。
- 6) たとえば、『四論玄義』巻第五、「三龍光伝開善云、実名在理。諦有三義。」（p. 21 b6-7. [崔] p. 180）などを参照。
- 7) 『大乘玄論』巻第一、「開善明、二諦一体。用即是即。龍光明、二諦各体。用不相離即。衆師雖多、不出此二。」（T45. p. 21 c11-12）を参照。
- 8) 『四論玄義』巻第七、「第八定林柔法師義。開善知蔵師所用。通而為語、仮実皆是正因。故大經迦葉品云、不即六法、不離六法。別則心識為正因体。」（p. 46 d16-18. [崔] p. 349）を参照。この中の「別」が心を正因とする立場である。
- 9) 「関（←開 [崔]）」は、底本（『大日本統蔵經』所収本）の「開」を[崔]によって「関」に改めたことを意味する。
- 10) 『大乘玄論』巻第三、「仏性義」の「五釈名門」は、「通名を釈す」と「別名を釈す」の二段からなるが、前者が『四論玄義』のこの段と同じ問題を扱っている。『大乘玄論』

(54) 『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第二釈名」の分析（菅 野）

- においても、通名の解釈として、三説を紹介しており（いずれも提唱者については無記名である）、その後自分の立場を説明している（T45. p. 38 b8–p. 39 a19 を参照）。これについては別稿を期す。
- 11) 『南本涅槃經』卷第三十二，迦葉菩薩品，「是故仏性非有非無亦有亦無。云何名有。一切悉有。是諸衆生不斷不滅，猶如燈焰。乃至得阿耨多羅三藐三菩提。是故名有。云何名無。一切衆生現在未有，一切仏法常樂我淨。是故名無。有無合故即是中道。是故仏説衆生仏性非有非無。」（T12. p. 819 b19–25）を参照。
 - 12) 『維摩經』の原文に基づいて改める。後注 13 を参照。
 - 13) 『維摩經』卷中，觀衆生品，「天問舍利弗。女身色相，今何所在。舍利弗言。女身色相，無在無不在。天曰。一切諸法，亦復如是，無在無不在。夫無在無不在者，仏所説也。」（T14. p. 548 c6–9）を参照。
 - 14) 『南本涅槃經』卷第八，如來性品，「仏法三寶性 無上第一尊」（T12. p. 650 a23）を参照。
 - 15) 底本の「仏果」を文意により「仏性」に改める。
 - 16) 底本の「仏性非果能為果本。故非果為二因」を文意により削る。
 - 17) 拙稿「慧均『大乘四論玄義記』の三種釈義と吉蔵の四種釈義」（『木村清孝博士還暦記念論集・東アジアの仏教』所収，2002 年 11 月，春秋社，pp. 87–100. 拙著『南北朝・隋代の中国仏教思想研究』[2012 年 2 月，大蔵出版] pp. 477–492 に再録）を参照。なお、『四論玄義』卷第五，「二諦義」には，横論顕發，豎論表理，当体釈名という三釈を示し，それに続いて一名と無量名，一義と無量義の相即を説いて，無方釈と共通する解釈方法を示唆して（p. 20 d9–p. 21 a15. [崔] pp. 178–179）。
 - 18) 五種仏性については，平井俊榮『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』（春秋社，1976 年）pp. 617–640（特に 618–627）を参照。
 - 19) 「灯（←燃 [続]）」は，底本の「燃」を『大日本統藏經』所収本の頭注によって「灯」に改めることを意味する。
 - 20) 『三論略章』には，「仏性有五種。他釈不同。開善云，一正因，二縁因，三了因，四果，五果果。正因者，心也。凡有心者，皆当作仏。故心為正因。縁因者，即十二因縁。了因即所生智慧，了出菩提也。果性即菩提。果果即大涅槃也。莊嚴云，衆生為正性。經云，正因者，謂諸衆生。縁因謂六波羅蜜。余同開善也。」（『大日本統藏經』2: 2, p. 295 d14–p. 296）とある。平井俊榮『中国般若思想史研究—吉蔵と三論学派—』（前掲同書）pp. 622–623 を参照。
 - 21) 『四論玄義』卷第七，「今明一往正法仏性，是正因性。若至論明之，仏性不當因果，而能起因果用。故非因非果。為正法仏性而能（←非 [崔]）生徧用。徧用，故有因有（←布 [崔]）果。非因而因。因有（←布 [崔]）二。謂因与（←興 [崔]）因因。非果而果。果有二種。謂果与（←興 [崔]）果果。非因而因。因有二種。謂因是即境界。因因即是觀智也。非果而果。果有二種。果与（←興 [崔]）果果。果即是菩提。果果即是大涅槃。」（p. 52 c1–7. [崔] pp. 368–369）を参照。
 - 22) 『六十卷華嚴經』卷第三十四，宝王如來性起品，「正法性遠離 一切語言道 一切趣非趣 皆悉寂滅性」（T9. p. 615 a3–4）を参照。

『大乘四論玄義記』「仏性義」の「第二釈名」の分析（菅 野） (55)

- 23) 『大品般若経』卷第七，無生品，「如舍利弗所問，何等是般若波羅蜜。遠離，故是名般若波羅蜜。何等法遠離。遠離陰界入，遠離檀那波羅蜜，乃至禪那波羅蜜，遠離內空乃至無法有法空。以是故遠離名般若波羅蜜。」(T8. p. 270 b28-c4) を参照。
- 24) 『維摩経』卷中，觀衆生品「又問。顛倒想孰為本。答曰。無住為本。又問。無住孰為本。答曰。無住則無本。文殊師利。從無住本，立一切法。」(T14. p. 547 c20-22) を参照。
- 25) 『大品般若経』卷第二十一，三慧品，「是般若波羅蜜能生一切法，一切樂說辯，一切照明。」(T8. p. 376 b9-10) を参照。
- 26) 正を中実と解釈する例として、『三論遊意義』，「所言中者，以実為義。」(T45. p. 119 b16)，『大乘玄論』卷第五，「今明。釈中亦具三種。如中以何為義。中以不中為義。中以何為義。中以実為義也。」(T45. p. 75 c28-p. 76 a1)，『三論玄義』，「総論釈義，凡有四種。一依名釈義。二就理教釈義。三就互相釈義。四無方釈義也。依名釈義者，中以実為義，中以正為義。中以実為義者，如涅槃釈本有今無偈云，我昔本無中道実義。是故現在有無量煩惱。」(T45. p. 14 a19-24) を参照。

(本研究は，2012 年度科学研究費補助金「基盤研究 (C) 23520069」による研究成果の一部である)

〈キーワード〉『大乘四論玄義記』，慧均，吉蔵，「仏性義」，『大乘玄論』，三種釈義
(創価大学教授，文博)